

- (4) 学級や学校の図書委員になったことがあるかどうか。
- (5) 学校または学級全体を相手に話をしたことがあるかどうか。

2 言語生活について

- (1) 言語の学習が次のことがらによって害されているかどうか。

ア 近視 イ 難聴 ウ どもり
エ 左きき オ その他の身体障害

- (2) 言語の習慣について、次の点に関する反省をする。

ア 日常の話し方（かっぱつに話す、普通、あまり話さない 以下同じ）
イ 集会における話し方
ウ 日記・反省録・創作の習慣（たくさん書く、普通、あまり書かない）
エ 教科書以外の読書（たくさん読む、普通、あまり読まない）

3 言語文化について

- (1) ラジオ・テレビなどを一日平均何時間ぐらい視聴するか。（時間）
- (2) ラジオ・テレビのどんな種類の番組を多く視聴するか、その名を書く。
- (3) 新聞を毎日読むか。（読む、読まない）
- (4) どの新聞を多く読むか、その名を書く。
- (5) 新聞のどの部分を多く読むか、その名を書く。
- (6) 一か月に何冊ぐらい本を読むか。（冊）
- (7) どんな種類の本を多く読むか。その名を書く。
- (8) 漫画を読むか。（読む、読まない）

② 石井氏はさらに、中学校初年級の生徒の言語経験を教師が評価するものとして次の例を挙げている。

- 1 落ち着いた自然の態度で話を聞くか。（正、否）
- 2 大ぜいで話を聞く場合の態度ができているか。
- 3 未知の人の話し合いの態度ができているか。
- 4 こみ入った話の内容を正しく聞き取ることができるか。
- 5 人の話を批判的に聞くことができるか。
- 6 会議に参加して適切に聞くことができるか。
- 7 話をする場合、発言ははっきりしているか。
- 8 声の調子や速さは適当であるか。
- 9 話題は豊富であるか。
- 10 辞書や参考書が適切に利用できるか。
- 11 進んで読書しようとする意欲があるか。
- 12 書物の取り扱い方は、正しいか。
- 13 必要に応じて適切な文章が書けるか。
- 14 漢字は、どの程度読み書きできるか。
- 15 文章の理解は確かであるか。

- 16 必要に応じて速く読むことができるか。
- 17 必要に応じて正しく音読できるか。
- 18 語いの数はどの程度か。（豊富、普通、貧弱）

これらを参考にして、項目を加除して調査すれば、個人はもちろん、学級や学年としてのおおよその傾向はとらえることができよう。

次に、国語能力を「聞く・話す、読む、書く」の領域別には握するための項目を挙げる。

③ 読むこと

この中で、生徒の読解力をさらに細かくみようとする場合には、試案ではあるが全国教育研究所連盟で出している次の表が参考になる。

1 文意理解力

- (1) 順序をおさえて読む力
- (2) 概略を読みとる力
- (3) 表現に即して読みとる力
- (4) 読みの過程において問題を発見し、考えながら読む力
- (5) 自分の経験と結びつけながら読む力
- (6) 読むことに興味をもち、自分から進んで読む力
- (7) 要点をおさえて読む力
- (8) 段落を読みとる力
- (9) 必要な細部を読みとる力
- (10) さし絵、グラフ、地図、写真などを文章と合させて読む力
- (11) 目的に応じて多様な資料を読む力
- (12) 目次、索引、図表などによって、必要な箇所をさがす力
- (13) 主題や要旨をつかむ力
- (14) 要約する力
- (15) 目的と必要に応じて多様な読み方をする力

2 批判力

- (16) 読んで感想をもち、それを表現する力
- (17) 自分の立場から批判的に読む力
- (18) 自分の読みの生活を内省する力

3 鑑賞力

- (19) すきなところやおもしろいところを抜き出す力
- (20) 情景や人物の心情、性格などを読みとる力
- (21) 場面や情景を思い描く力
- (22) 表現のすぐれたところを読み味わう力

④ 書くこと

作文についての実態をとらえるには、次のような項目が考えられる。

ア 表記

漢字、ひらがな、かたかな、ローマ字の使い分